

(1日本史プリント4-6)

第5章 武家社会の成長 3. 室町文化 e, 庶民文芸の流行

① 民衆芸能…[1 猿楽] [2 田楽] の流行→しだいに上流階級へも広がる

幸若舞・古浄瑠璃・小唄(閑吟集の編纂)、盆踊りの定着

多人数が参加し、共同で行う(茶寄合・連歌・盆踊りなど)

雑芸能(千秋万歳・放下・傀儡・猿回し・獅子舞)多くは放浪芸=3 卑賤視される

門づけ 祝言 曲芸手品

② [4 連歌]…二条良基「菟玖波集」(南北朝期)→勅撰集に準ずる

[5 宗祇]「新撰菟玖波集」=正風連歌 「水無瀬三吟百韻」など

山崎宗鑑=俳諧連歌(「犬筑波集」) 自由で滑稽

③ [6 御伽草子] の流行=「ものぐさ太郎」「一寸法師」など

室町時代には、民衆の地位の向上により、民衆が参加し楽しむ文化も生まれた。より素朴で娯楽性の強い[7 能] がさかんに演じられ、能のあいだに演じられた風刺性の強い喜劇である[8 狂言] は民衆の生活などを題材に、せりふも日常の会話が用い、民衆にもてはやされた。庶民に愛好された芸能としては、このほかに幸若舞・古浄瑠璃・小歌などがあり、小歌の歌集として『9 閑吟集』が編集された。民衆に好まれた物語に[10 御伽草子] がある。

連歌は、応仁のころ[11 宗祇] が正風連歌を確立し、『12 新撰菟玖波集』を撰し、弟子たちと『13 水無瀬三吟百韻』をよんだ。これに対し、宗鑑はより自由な気風を持つ[14 俳諧連歌] をつくり出し、『犬筑波集』を編集した。連歌はこれを職業とする[15 連歌師] が各地を遍歴し、普及につとめたので、地方でも大名・武士・民衆のあいだに広く流行した。今日なお各地でおこなわれている[16 盆踊り] も、この時代からさかんになった。

f, 文化の地方普及

① [17 応仁の乱] による京都の荒廃→公家・僧侶など地方へ逃れる=[18 小京都] の形成
とくに[19 山口] など

② 地方武士等の教育熱の高まり

文字の文化が広がる→商工業者、農民に

実用教科書…[20 庭訓往来]・実語教・童子教・御成敗式目、簡易辞書…[21 節用集]

③ 儒学の地方普及

桂庵玄樹→南学派(薩摩など)、南村梅軒→海南学派(土佐)

[22 足利学校] (上杉憲実) の再興

g, 宗教界の下剋上

① 旧仏教の[23 没落] ←荘園の崩壊、保護者である朝廷・貴族の没落

鎌倉仏教の発展…武士、[24 農民]、[25 町衆] (商工業者) などの信仰→都市や農村に広まる

② 禅宗 五山派→幕府の衰えにより衰退

[26 林下] =自由な活動を求め各地に布教→地方武士、民衆の支持

[27 一休宗純] ら 拠点…[28 大徳寺]・妙心寺・永平寺など

③ 日蓮宗 京都に進出、戦闘的な布教で公家や市民の信仰を集める([29 日親] ら)

→とくに[30 京都] の町衆の支持を得る=[31 法華] 一揆を結成し自治的に町政を運営

↓

他の宗派(一向一揆・延暦寺など)と激しく対立、迫害を受ける(1536[32 天文法華] の乱)

④ 浄土真宗([33 一向] 宗) 農民、[34 交通]、商業、[35 手工業者] らの支持を得る

→本願寺の[36 蓮如] (15世紀) 精力的な布教活動([37 御文章] を利用)

[38 惣村] を宗教単位に[39 講] を組織・

惣百姓を組織→[40 地侍]・[41 国人] をもまきこんでいく

・各地で[42 一向一揆] をおこす→[43 加賀の一向一揆] =一世紀にわたって国内を支配

・[44 寺内町] の形成…[45 石山本願寺]、金沢、[46 吉崎]、富田林、今井(糧原市) など

[47 手工業者]・商人らが集住=経済の拠点として発展

天台・真言などの旧仏教は、朝廷・幕府の没落や[48 荘園] の崩壊によって、しだいにおとろえていった。これに対し鎌倉仏教の各宗派は、武士・農民・商工業者などの信仰を得て、都市や農村に広まっていった。

禅宗の[49 五山] 派は幕府の衰退とともにおとろえ、これにかわって、より自由な活動を求めて地方布教をこころざした[50 林下] とよばれた禅宗諸派は、地方武士・民衆の支持を受けて各地に広がった。林下の禅の布教の中心となったのは、曹洞系では[51 永平寺]・総持寺、臨済系では大徳寺・妙心寺などであり、僧としては大徳寺の[52 一休宗純] が有名である。

はじめ東国を基盤にして発展した[53 日蓮] 宗は京都へ進出した。とくに6代将軍足利義教のころに出た[54 日親] 戦闘的な布教で激しい論戦をおこない、しばしば迫害を受けた。京都で財力をたくわえた商工業者には日・宗の信者が多く、彼らは1532年、[55 法華一揆] を結んで、一向一揆と対決、町政を自治的に運営したが、1536年延暦寺と衝突し焼打ちを受けて、一時京都を追われた。これを[56 天文法華の乱] という。

浄土真宗(一向宗)は、農民のほか、各地を移動して生活を営む商人や交通・手工業者などにも受け入れられて広まっていった。とくに応仁の乱のころ現れた本願寺の[57 蓮如] は、その教えを平易な文章([58 御文])で説き、[59 講] を組織して惣村に広めた。こうして本願寺の勢力は、北陸・東海・近畿地方に広まり、各地域ごとに強く結束し、強大なものとなった。そのため、農村の支配を強めつつあった大名権力と門徒集団が衝突し、各地で[60 一向一揆] がおこった。その代表的なものが[61 加賀] の一向一揆であった。